

審査結果の概要

本論文の内容は、公開審査会(平成26年11月6日10時30分~12時00分、文学部会議室)において説明がなされ、質疑応答が行われた。

西川論文の審査会で討議された主な論点と研究史上の意義は以下のとおりである。

○審査会で取り上げられた主な論点

・宮廷と官房の活動内容と顧問官の関係について。とくに宮廷が外交や儀礼の場として統治にも関与したのに対し、ザクセンやヘッセンでは官房が文書行政を中心に統治に関与するようになったとする見解、および後者では顧問官が官房に所属するようになったとする点について。

・ザクセンやヘッセンでの官房が統治権を行使するようになる過程と、市民出身の学識顧問官が姻戚による門閥形成や官職の世襲化によって「貴族」化する過程の対応関係について。

とくにヘッセンにおいて、シュマルカルデン同盟結成を契機として貴族化が展開したとする事実関係について。

・バイエルンにおける宮廷長の位置づけ、および宮廷と官房の職掌分担関係について。

・各宮廷令と官房令に関する先行研究の議論内容と、本論文が独自見解とする顧問官の統治関与における差違の指摘との関係について。

・「宮廷外顧問官」と学識を持たない貴族顧問官との相違について。より古いタイプの貴族顧問官すなわち君主に適宜助言した「宮廷外顧問官」の存続と、大学での学識を持たない貴族顧問官との関係を明示すべき点について。

とくに、貴族顧問官が外交を担当した事実の捉え方、帝国議会への派遣を有名無実とする評価、外交実務は学識顧問官が担当したとする論拠について。

また、ヘッセンにおいて、君主フィリップがシュマルカルデン同盟結成前後から外交担当を旧来の貴族出身者から側近の顧問官に交代させたとする事実関係について。

・アルベルト家ザクセンにおいて、君主の意向を離れ、独自に外交活動を展開し、旧来型の宮廷外顧問官ととらえられるゲオルク・フォン・カルロヴィッツの事例検討を、典型例とするのか、特異例とするのか、その位置づけについて。

シュマルカルデン同盟をめぐる外交でのゲオルクと主君モーリッツとの主導権の事実関係について。

ゲオルク・フォン・カルロヴィッツの引退と共に、モーリッツがシュマルカルデン同盟とのパイプを失ったことが、彼が皇帝側に立って戦争に参加する契機となったとする評価について。

- ・史料引用における訳語、誤字について。とくに訳語の変更により文意が変わることになり、例証が不十分になる一例について。

- ・ザクセンにおけるライプツィヒ大学の学識顧問官養成と顧問官ハラッハなどの事例との事実関係について。

- ・論文構成全体と論述方法の改善すべき点について。

- ・官吏の成立に関し、官吏の特徴をより広い歴史的視野から分析する必要について。

- ・以上の点について質疑し、概ね具体的な説明と補足が行われ、また改善すべき点の確認が行われた。

○研究史上の意義

本論の成果は、学識顧問官が台頭する以前に、貴族顧問官が「助言者」から「官吏」へと姿を変え、彼らが領邦統治を担う常勤の「官吏」として活躍をする過程を経て、はじめて市民出身の学識顧問官の台頭も起きたことを指摘しえたことにある。

さらに、関係規定だけでなく、顧問官の個別調査を通じて、先行研究の見落としとしていた事実関係を明らかにできた点があること、他領邦の顧問官との関係に着目することで、従来注目されることの無かった外交担当の顧問官の変化を示したことは評価できる。

また、今後、帝国全体に視野を広げて検討することが必要であるとは言え、帝国政治、同盟関係など外的要因が、顧問官の官吏化と統治行政の転換に影響する大きな要因であったことを示し得た点は、学界において今後の研究を促すものと認められる。

以上から、本委員会は、博士の学位を授与するに値すると判断する。